名古屋大学東洋史研究報告　四十二号　二〇一八年六月発行

小特集　安田二郎氏を偲ぶ

安田先生講演「『蓋愆』の孝について―後漢末・六朝期におけるその生成と展望―」を聴きて

榎本　あゆち

平成二八年一〇月二九日、大東文化大学板橋校舎において、安田先生は表題に掲げた講演をされた。先生の講演として筆者が聴くことの出来た最後のものとなった。ここにその概要を記し、筆者の感想を述べたいと思う。

（一）

先生は先ず冒頭で『資治通鑑』晋紀三哀帝興寧三年の条記載の沈勁の死にまつわる事情を伍耀光『通鑑論』の記事を引用し紹介する。その内容は、沈勁の父沈充がかつて東晋初期の王敦の叛乱に与し乱中に死亡した事、沈勁が圧倒的多数を誇る前燕慕容恪の軍に対し僅かな手勢を率いて洛陽で抵抗・奮戦した後死亡した事、沈勁のこの壮烈な行為は、父の愆、即ち過ちを自分の死をもって償う「蓋愆」という行為であり、沈勁自身若き日よりこうした機会の有ることを待ち望んでいたというものである。講演では是に続いてこの「蓋愆」という行為、不名誉な父あるいは祖先をもった子孫が自分自身の死を賭した壮烈な行為、あるいは顕著な徳行によって亡き祖先・父をも含む一門一族の名誉を挽回し、子としての「孝」を達成する事を称揚するその風潮が、決して中国上古の時代から通時的に存在していたのではなく、後漢末以降六朝期、特に東晋期に明確に現れる事を指摘する。

何故後漢末・六朝期、特に東晋期と言いうるのか、安田先生は先の記事に続いて沈勁の死についての司馬光の評語を紹介する。司馬光はその行為を称えた後、周易「蠱」象辞「（六五）幹父之蠱、用誉」（父の蠱をただす、もって誉れあ

り）と、尚書「蔡仲之命」の「爾尚蓋前人之愆、惟忠惟孝（なんじ前人の愆を蓋わんとこいねがう、これ忠、これ孝）」を引用し、「其れ是の謂いなるか」と賞賛している。安田先生は、ここで周易の記事については唐の李鼎祚『周易集解』を紹介し、この父の誤りを正すという事に興味を示し注解をなした人物に三国呉の虞翻、後漢末の荀爽がいる事、特に虞翻は父の誤りとして単に日常的生活の中の一般的な誤りというのみならず「大過に死す」（叛乱・反逆に与しての死）というケースを想定した事を指摘する。又尚書「蔡仲之命」が所謂偽古文尚書の記事であること、すなわちそれは春秋左氏伝の関連する記事を基に偽作され東晋期に世に出たものであることを指摘し、さらに史学ばかりか経学にも秀でた司馬光がこの周易と偽古文尚書の記事をあげているのは、これが父の誤りを正すという事柄に関する経学的記事のうち時代的に遡り得る最も古いものだとの司馬光の認識に基づくとする。この周易の注釈・偽古文尚書「蔡仲之命」の存在から「蓋愆之孝」の称揚は後漢末に始まり、六朝期、特に東晋期に明確となったと先生は指摘するのである。

ここまではいわば序論でこの後本論として沈勁と同じく父祖の愆を蓋うため壮烈な生き方と死を遂げた人物の例として南斉の褚賁と梁の張嵊をその『南史』の列伝の記事をもとに紹介された。ただ先の序論の部分、特に周易の注と古文尚書について極めて丁寧・懇切に時間をかけて説明されたために、ここで時間切れとなり最後まで到達することが出来なかったが、この序論の部分だけでも筆者には大きな刺激・衝撃となるものがあった。残された部分についてはレジュメの記述と筆者の考えも交え後述したいが、ここまでの部分について筆者が受けた「刺激」「衝撃」についてやや少し詳しく述べてみたい。

（二）

先ず冒頭で沈勁の事績が紹介されたが、一瞬筆者はなぜ『晋書』によってではなく『資治通鑑』なのかと疑問に思った。しかしそれはすぐ後の司馬光の評語、特に周易と古文尚書「蔡仲之命」の文言を引き出すため、さらに易の注解と古文尚書に関する経学的所見から蓋愆の孝を称揚する風潮の時代性を確定するためと了解された。周知のように安田先生は、史料の徹底的読み込み、即ちその編者の置かれていた政治的社会的境遇・思想・信念といった周辺的条件を徹底的に

博捜し、史料の記述に込められた編者の意図をくまなく照らし出し、さらには史料からその編者のバイアスを取り除き、史実に直截に向き合うことにおいて余人をもっては代えがたい業績を残された（こうした先生の業績については川合安氏の周到なる解説「安田二郎教授の業績と学風」『文化』六六巻第三・四号、二〇〇三、及びその著書『六朝政治史の研究』に対する葭森健介氏のこれも懇切極まる書評『東洋史研究』第六二巻第四号、二〇〇四、を参照のこと、ちなみに小文の安田先生業績に関する初期・中期などの表記はこの葭森氏の記述に基づく）。しかしここでは史書の内容に関する編者司馬光の評語が、司馬光の意図というよりは蓋愆の孝を称揚する風潮という史実の時代性の考証につなげられている。その考証においては経書の「本文」（周易象辞）にいかなる注解がいかなる人物によって付されているのかという点、あるいは偽古文尚書としての根本的問題点が総合され一つの結論に到っている。史書編纂者の評語に基づいてこんなことが出来るのか。引き比べるのもおこがましいが、筆者自身であれば司馬光の評語を読み、その表面的な意味を読み取るだけで、その賞賛の態度を理解するのみだったろうと思う。引用された経書の意味は調べるだろう、しかしその経書の注解などにはけっしてたどり着けないであろう。こうした思いに駆られるほどまさに衝撃的だったのである。但しさらに次のような思いにも行き当たった。これら経書・史書・あるいはそれらに付された注解という伝統的文献資料によって、まだまだ明らかにされるものがあるのだ、なにも新たな史料（資料）、例えば新出土資料に依らなくても、新たな歴史研究が出来るのだ、いや、やらねばならないのだ、と。この意味に於いてこの講演は大きな刺激を与えてもくれたのだった。

（三）

講演後の慌ただしい時間の中、一言だけ先生に蓋愆の孝を称揚する風潮の時代性確定について感銘を受けた事を告げ、そして聞けなかった結論についてお尋ねしたところ、一言「儒教による人間の疎外です」と答えられた。蓋愆の孝を成し遂げるために我が身を犠牲にし、凄惨な死をも遂げる人々を紹介する内容である以上、それは自然な結論かとも思える。しかし長年先生の著作を読み学んできた後学の者としては、奇異にも受け取られるものだった。なぜならば先生はその初期の業績において南朝門閥貴族体制から排除・疎外され

た様々な寒門寒人が王朝革命軍団や叛乱に参加していたことを指摘し、その台頭を跡づけ、こうした運動に触発され門閥貴族層内部にも門閥一辺倒から才学中心のあり方への自己革新運動が生まれていたとした。そしてこの寒門寒人層と門閥貴族層内部の動きが合体し、隋唐の科挙制に象徴される新たな地平へと繋がる事を指摘している。そしてその才学の中心は、先生中期の業績の代表作王僧虔の誡子書に関する論考に指摘がある。六朝の人に相応しく玄儒文史から実学まで極めて幅広い学術を修めた王僧虔について先生が最後に指摘するのは、「経世済民」「莅民」の学、即ち儒学なのである（前掲安田先生著書第一二章、参照）。この儒学を中心とする才学をもとに新たな時代への動きが南朝社会に胚胎されるとするのが先生の南朝史研究の要点なのである。ここでは儒学は歴史展開の上で積極的な要素とされている。したがって筆者はこの講演に込められた先生の結論に奇異の感、更に言えば意外な思いを抱かされたのである。そのためこの講演後筆者は先生のこれまでの研究とこの講演の内容とがいかに接続するのか、それを時折考えてきた。講演後生前の先生に一度だけお会いする機会があったのだが、ついお考えを伺う機会を逃し、あるいはいずれ先生ご自身で文章化されるだろう、それを待ちたいとの気持ちもあり、結局今日に到ってしまった。そのためここでは講演のレジュメと先生の既発表の論考をもとに、この点について次に考えてみたい。なお先生の発表レジュメはいつものことであるが関連する文献・史料・資料のみ表記され、ご自分の主張・論理展開部分などは書かれていない。したがって筆者のここからの記述はかなり不確かな部分が多いことをご承知いただきたい。

（四）

この講演の内容と先生の既存の業績との接点は、講演の末尾で言及された褚賁・張嵊の事績にあるとおもわれる。先ず褚賁について。褚賁は南斉の元勲褚淵の息子である。褚淵が劉宋王朝の劉氏と幾重にも重なる姻戚関係にありながら、劉宋を倒し南斉王朝を創建した蕭道成の謀臣となり、その王朝革命成功の原動力となった事、それと異なり劉宋王朝に忠節を貫き通し殺害された袁粲、この二人の門閥貴族の評価をめぐって当時様々な言説が行われ、又史書によって異なる評価が記されている。先生はその中期業績の中での今一つの代表作となる袁粲・褚淵論（前掲安田先生著書第一三章、参照）

において両名の評価をめぐる言説の主体となった人物の背景を深く探求され、その評価の究極の意図を次のように捉えている。袁粲称揚・褚淵批判論は単なる忠義論ではなく対人関係上の「信義」論の立場であり、国家観でいえば互恵的君臣観を基軸とする実体的国家観に立つ。一方褚淵称揚・袁粲批判論は、人々の道徳的経済的充足（経世済民）を最重要視し、皇帝・官僚もそのための具体的機構として捉える機能主義的国家観に立つとする。この二つの立場はともに、五世紀後半期、新興層の台頭を目の当たりにした貴族層の才学主義あり方への自己革新の自覚とともに、貴族層がおのれにそのあり方を問うモラル・倫理問題の波動だと先生は考えられる。そしてこの波動は五世紀極末から六世紀にかけて、すなわち南斉末から梁代にかけてさらに輪をひろげて波及したとする。先生はこうした文脈の中で褚賁について、『南史』の褚賁伝に基づきその悲痛な生涯を紹介する。賁は父の行動に賛同容認できず、かつそれを恥じて政治世界との縁を切り、人々の嘲笑にさらされ汚名にまみれた父の救済を、己の孝子たるあり方に賭けて生涯を閉じた。生前父淵の墓所に廬を建て移り住み過酷な服喪の生活を送り、唯々『孝経』の指示する最も基本的な「孝」規範―身体髪膚を毀傷せざること―を全うする事を目指す。己の死後その息子達がその意志を理解せず、遺体を墓所に運ぶ過程でその身に傷が付くことを恐れ、其の死まで父の墓所で服喪生活を送ったのである。先生はこの褚賁の行動について、これに類いする行い、即ち講演の題名にある「蓋愆の孝」が史書にまま見られることを王鳴盛『十七史商搉』巻六〇「褚賁伝互有短長」の記事を紹介することで示している（先生著書六八二頁、注一四）。ただこの王鳴盛の記事には王莽期から王安石の時代にいたる幅広い時代の事柄が示され、いわば通時的・超時代的なものとして捉えられている。これに対し先生はこの蓋愆の孝が一定程度時代性を帯びるものだとしてこの講演をされたのだと筆者は考える。

次に張嵊について。管見の及ぶ限り先生は既存の論考において張嵊については言及されていない。しかしその父張稷について簡単な言及がある（先生著書六七九頁）。講演においても『南史』巻三一張稷伝をレジュメで紹介しその事績を解説された。張稷は南斉末蕭衍（梁の武帝）の革命軍が建康を包囲する中、暴虐の皇帝東昏侯殺害を謀り、討ち取られたその首を蕭衍に差し出した。『南史』巻三一張稷伝は、結果として梁武帝の斉梁革命を最終的に達成させることになった稷

が、かえってその事柄によって武帝から「袖に帝首を提げ、衣は天血に染まる」と揶揄されるに到った事、多くの人士の口実（噂話のネタ）となったことを羞じ、尚書左僕射から辺境青冀二州刺史への転出を自ら願い出て、その地で州人の叛乱に遭い、殺害されたことを記す。この屈折した張稷の悲痛の後半生について安田先生は、袁粲・褚淵をめぐるモラル・倫理問題の波動の輪の一つとしておられる（先生著書六七九頁）。『南史』は張稷伝につづいて張嵊について侯景の叛乱時、侯景の部将劉神茂や侯子鑒の軍と果敢に戦ったこと、敗れ捕らわれたが、その人柄を惜しんだ侯景によって命を助けられようとしたがそれを拒否し、子弟十数名共々殺害されたことを記す。先生は講演においてこの張嵊の死についても父稷の違を矯めんとする行為だとする『南史』編者李延寿の史評を紹介している。即ち先生は張嵊の壮烈な死を「蓋愆の孝」の一事例として挙げ、貴族層がおのれにそのあり方を問うモラル・倫理問題の波動が梁代末期にまで影響を及ぼしていたことを指摘されようとしていたと考えられる。但しその波動は褚賁・張嵊の最期を見る限りきわめて悲劇的な結果のみもたらしている。先生はそこから「孝」観念を中心とする儒教が後漢時代以降社会への浸透を深めるにしたがい起きた一種の人間の疎外状況を見いだし、「経世済民」の学たる儒教の裏面にある負の側面を指摘されようとしたのではなかろうか。特に褚賁の厳しい服喪生活についてかなり感情を込めた叙述がなされ（先生著書六一七頁）、また講演においても時間切れが迫る中この点について急ぎ足ではあったが詳しく述べようとされていた。父の墓所に廬を営みそこで厳格な服喪の生活を送るという所謂「外形的規範」遵守のあり方に、儒教の形式化の弊害の一端を見ておられた気もする。

（五）

筆者はこの褚賁・張嵊の事績に関し、先生が『南史』を引用し紹介しておられることに特に強い興味を持った。筆者自身『南史』の性格について論じた事があるためだが、先生の論文「その後の袁粲と褚淵—評価の変遷—」（『集刊東洋学』第五四号、一九八五）において以下のような指摘がなされているからである。『南史』の編者李延寿は先行する南朝正史のおおくの記事を削り取り、逆に他書に見られない独自の記事を書き加えている。袁粲・褚淵に関する記事にもこうした特徴が顕著に見られるが、その独自の記事のかなり多くのも

のに李延寿自身の創作、つまりでっち上げのものが含まれている（筆者はこのでっち上げ論については少々意見を異にしているが、これについて今は論じない）。李延寿はそうした改ざん・書き換え・でっち上げをしてまで袁粲称揚・褚淵批判を強調する。これによって袁粲の忠臣としての、反対に褚淵の不忠の臣としての輪郭が明瞭となり、この『南史』によって形作られた袁粲・褚淵像が唐代以降固定化していくとされる。因みに先述した褚賁の厳格な服喪生活・悲痛な最期についての記事も『南史』独自のものである。この点を含む褚淵・褚賁父子の『南史』における描写については先程来紹介した先生著書第一三章とこの論考に詳細な指摘があるが、張稷・張嵊父子に対する史書記載についてはこの講演において始めて、但し時間切れのためごく簡単に触れられ、尻切れトンボに終わってしまった。そこでこの点について先生が言わんとされたことについて筆者の考えを述べておきたい。

張稷に対して為された梁武帝の揶揄、多くの人士の口実の的となったこと、青冀二州刺史への転出を自ら願い出た事などは『梁書』に記述はない。一方張嵊については『梁書』と『南史』の間にそれ程の具体的な内容の差は見られない。但し『梁書』は張稷と張嵊とをそれぞれ別巻に立伝している。したがって『梁書』の張嵊伝を読んでも父稷との関わりは直ちには浮かび上がってこない。一方『南史』はよく知られているように同族の伝を朝代の差を無視し、同一巻に立伝している。そのため張稷・張嵊父子のあり方は一続きのものとして容易に理解される。『南史』の張稷伝を踏まえて張嵊伝を読めば、張嵊の壮烈な死はまさに「蓋愆の孝」としてすんなり読者の腑に落ちるようになっている。もとより先生はこの講演において『南史』の史料論について話される意図はもっておられなかったと思う。但し『南史』によって張稷・張嵊父子の生涯を紹介されていることは。張氏父子についても褚淵・褚賁父子と同じく不忠なる汚名にまみれた父を子がその徳行によって名誉回復せんとする「父子の物語」として描こうとする李延寿の強い意図をそこに読み取っておられたのではなかろうか。『梁書』張稷伝・張嵊伝との比較検討を通して、筆者はそうした感を深くする。

先生は講演レジュメの最後に西晋の太常博士秦秀の事績を紹介している。忠直さと学術を以て知られ、讒佞の徒を仇敵の如く憎み、賈充・何曽ら顕貴の人々にも遜ることの無いその性格、さらには斉王攸の就国問題についても武帝に真正面から諫言するなど皇帝に対してもはばからない態度が『晋

書』に記されている。この秦秀の父である三国魏の秦朗について先生は『三国志』明帝紀青龍元年の条に付された裴注所引『魏氏春秋』の記事を紹介している。それによれば秦朗は母が曹操の側室となったため曹操の後宮で育ち、武帝・文帝の世を経て明帝の側近として親愛された。明帝に対してはその過ちについても何ら諫めることなく、佞倖として生きた人物である。裴注は続けて魚豢の『魏略』では秦朗が佞倖伝に立伝されていることを記す。一方陳寿『三国志』本文には秦朗の佞倖ぶりを示す記述はないと、先生の注意書きがレジュメに付されている。『晋書』秦秀伝を読む限りでは浮かび上がってこない秦秀の剛直さ・忠直さの淵源が、裴注の記事を合わせ読むことに佞倖との汚名を受けた父秦朗に対する何らかの反応ではないかと考えられる。我々の世界であれば父を反面教師としてとか、父に対する息子の反発などと理解されるであろうが、やはり先生はこれも父の汚名をはらす「蓋愆の孝」として捉えられたのであろうか。その正否はさておき、いくつかの史書を読み合わせることによって一つの史書の記事も、複雑な意味合いを見せること、これは確かであろう。

（六）

以上先生の講演について聴くことの出来たもの、出来なかったものそれぞれについて感じるところを述べてきた。「蓋愆の孝」の後漢末・六朝期における生成と展開について筆者の「妄想」を交えてそれなりに了解したが、その後の時代における展開・影響など伺いたいことは山ほど残っている。また袁粲・褚淵論で提示された互恵的君臣観を基軸とする実体的国家観と、皇帝・官僚も経世済民実現のための具体的機構として捉える機能主義的国家観、その相互関係とこれもその後の時代に於ける展開・影響といった先生の歴史観の根幹に関わる問題もそのまま残されている。

先生の研究から筆者がそして多くの研究者が受け取るのは、史料に対する徹底的な読み込み、いくたの史料・資料をつきあわせてのこれまた徹底的な比較検討というその姿勢である。それによって先生はそこに何が書かれているかという事とともに、いかに書かれているかという事をも明らかにされてきた。先生の残された問題には我々が今後我々自身の課題として少しずつ少しずつ答えていくしかないと思われる

が、その方法については先生が身を以て示された姿勢を自らのものとしていく事のほかにはないであろう。我々は現在多くの史料・資料の電子化によって何が書かれているかそれを博捜するという点にあまりにも傾きすぎてはいないだろうか。それがいかに書かれているかという事により多くの思いをいたすべきであろう。先生の最後の講演のあの声を思い出しつつ、そう思った次第である。

（先生の通夜の席上参列者の方々から、この講演は大東文化大学ばかりでなく、その他の場所でもなされたと伺いました。そうした機会に講演の最後まで聴講された方も多々おられると思います。筆者が聴けなかった部分について、あるいは聴くことの出来た部分についても、それはこうだった、それは違う、と教えていただければ、そしてそれを契機として安田先生の業績について大いに語り合えれば甚だ幸いです。）

（えのもと　あゆち）